

幾星霜

—私事にわたる謝辞—

教授 沙加戸 弘
(国文学)

年齢から言えば筆者は紛もなく大学紛争の世代であるが、幸か不幸か在籍した大学は筆者卒業の後紛争となり、大谷大学に縁を得た時には、まだその余波はあったものの、紛争自体は終焉に向っていた。

在籍した大学が筆者卒業の後紛争となり、騒然としていた中で、学生一派が大学本部と図書館を封鎖した。その時先師(夢にも忘れ難い我一生の恩師である)が全学集会で、日頃の温厚さからは想像もできぬ強い主張をなされた、と後に後輩から聞いた。その要旨は、

大学はまずもって研究の場である。従って大学は事実の解明というところに本義を持っている。そしてそれが、教育という働きを生むのである。

その大学において、大学本部はともかく、図書館を封鎖するは、人間の存在を否定するにも等しい暴挙以外の何ものでもない。図書館は、右であれ左であれ、北であれ南であれ、齊しく依って立つべき研究の基である。言わば図書館は大学そのものである。

図書館を封鎖した学生に問う、君達は大学を否定しようとしているか、大学人として主張しているか。大学を否定するならこの場から去れ、大学人としての行



動ならばすぐさま図書館の封鎖を解け。意を尽してはいないと思うが大略以上のよ
うな発言であった、と聞く。

その後、大谷大学に縁を得て、先達のはかり知れない叡智と後に来る者への熱い思いを眼のあたりにすることとなった。

「図書館ちゅうのはな、大谷大学の図書館のこっちゃ。ほかのはな、図書館とは言わへんのじゃ。」というのは、筆者の兄の暴言である。筆者はこの言葉を、中学一年生から、朝夕呪文の如く聞いて育ち、今では大きな声では言えないが、ほぼ似たような感慨を持っている。

亡父は、大谷大学への進学を熱望していたが、道場の事情がそれを許さなかった。而して兄が大谷大学に進学した時は、まこと深い慶びをもってこれを賀した。若き日の、筆者

の気まぐれの如き転進を容認したのも、その先が大谷大学であったからである、と筆者は確信している。

過ぐる親鸞聖人七百回の御遠忌の時、兄は大谷大学の真宗史学に在籍していたが、新しい図書館(現・至誠館)の完成を、父・兄ともにこの上ないよろこびとしていたことが、中学生にもよくわかった。

その大谷大学の図書館の改築に、平成十二年の春から二年間、図書館長として携わった。これによって筆者が十五疋の減量を果したのはおまけである。

思えば奇しき縁である。釈尊以来の先達の思索と研鑽の結晶の如き図書館を、はたまた『ウォーナーズ・リスト』所載の図書館を、

自らの研究の拠点とすることができたこと、注・『ウォーナーズ・リスト』は、その成立過程も、その作成に携わった人々も、いや何よりもその作成目的が、巷間伝えられているところとは大きくその趣を異にするが、結果として欧米の人々が、日本文化並びに東洋文化において、特別のはからいを必要とする、かつかけがえのない遺産として認識したものの一覧である、という点はいさゝかも揺がない。

そしてその働きを現代にまで伝え続けて下された方々に出遇えたことを、無上の喜びとして、ここに深甚の謝意を表すものである。
